
インセクトワールド

洸淋寺 凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インセクトワールド

【Nコード】

N9463C

【作者名】

洸淋寺 凧

【あらすじ】

今から数億年後、地球は大きく変化する。人類と昆虫一時合体、そして一時合体に必要な琥珀、インセクトストーンを巡る主人公「ライ」と一時変換装置の「ザック」心悪しき兄から一度破滅しかけた地球を守るためにライ達は旅に出る！

ブローグ

一億五万三十年後、全ての人類と共に、地球半滅亡。

一億六万年後、地球が昆虫の星になる。

一億七万八千年後、哺乳類誕生。

二億十年後、突然変異により猿型哺乳類誕生。

二億五十年後、類人猿にちかいものへ進化。

二億百年後、人類に近いものへ進化。

二億二百年後、人類復活。地球は人類の星となる。

二億二百五十年後旧昆虫の琥珀（化石）を発見。DNA一時変換装置の研究が始まる。二億二百六十年後、DNA一時変換装置の研究が完成。それと同時に旧昆虫の琥珀から昆虫のDNAを取り出す事が可能になった・・・

「ライ、インセクトストーンは渡してもらおう……」
「……」

そしてインセクトストーンは兄によって盗まれた。

コツコツ……

「起きてる？ライ??」

バン！

勢いよくドアが蹴破られた。

「ら、ライ??ど、どうしたのその格好……」

「ちえ、チエチイ……」

「アガーガー」

「ザック……」

つと、こちらで自己紹介！オレの名前はライ！家には先祖代々伝わる昆虫の琥珀、一般的はインセクトストーンが伝わっていたんだけど……兄さんに盗まれてしまったんだ！兄さんはどこかの組織のボスをしていて、きっとインセクトストーンを悪用しようとしているにちがいない。しかし、一つ助かった事がある。オレはこんな時のためにインセクトストーンを一つ、チエチイに預けていたんだ！

で、まあそのチエチイなんだが、まあ説明はオレの幼なじみだつて事くらい。そしてザック！ザックはチエチイのペットなんだぜ！そしてインセクトストーン！こいつは前で言ったとおり、昆虫の琥珀なんだ！しかも琥珀は琥珀でもDNAの取れる琥珀なんだ！普通、琥珀の中の物は圧力がかかっているため、DNAが崩されてしまっているんだそうだ！しかし、数万個に一つ、DNAの崩されていない琥珀があるんだ！その琥珀のDNAを一時変換装置で読み込む！すると自分とそのインセクトストーンの住人が合体する。

しかしインセクトストーンの住人には意思（息すら無いが）が無い。つまりは自分の意思で動かせるってことさ！

と、一つ言い忘れがあった！一時変換装置には二つ種類が有って、意思の有る一時変換装置と、意思の無い一時変換装置があるのだ！で、ザックも実は一時変換装置で、種類は前者の方だ！と、いつてもまだDNA変換はしたことがないがね！

と、まあ自己紹介はこの辺にして、本題に入りたいと思う。

オレは兄さんに盗まれインセクトストーンを取り戻さなければいけない！でないとこの世界……いや、この星が危ない。一度滅びかけたこの地球に次はないだろう。

「ライ、インセクトストーンを取り戻しに行こう！」オレから話しを聞いたチェチイは言った。

「チェチイは来なくていい……。そのかわり、ザックを貸してくれないか？」ハッキリいつて、インセクトストーンを持つていないチェチイは戦力外、すなわち足手まといだ！チェチイの気持ちは嬉しいが、チェチイを危険な目に合わせるわけにはいかない。

「分かったわ……。」「チェチイは残念そうに顔を伏せた。

「ザック……。行こう」

「あ、アグウ……」なんだかザックは淋しそうだ。

「絶対に……。死なないでね」

「お、おう！」そして、オレ達の旅は始まった……

オレ達が旅に出て今日で三日目、そろそろ食糧の尽きかけている
なか、インセクトストーンはまだ一つ、テントウムシの石のみ・・・
・「おまえがライだな！」

「誰だ！？」

オレが声のした方を見ると、一人のリーゼント男がいた。

「オレの名前はリーゼント太郎！おまえの兄さんの命令でテントウムシの石を回収に来た！」

「なぜテントウムシの石が必要なんだ？インセクトストーンにはカブトムシやクワガタの石も あったろうに！それがあればこんな雑魚石いらないだろ？」

「ガリレイ様はテントウムシの石を回収して来いとおっしゃって
いた、オレはそれに従うまで！」

そうか、兄さんはガリレイと呼ばれているのか・・・

「早速だが、交渉しないか？ガリレイ様はお優しいお兄様なので
なるべくあなたを傷つけないようにとおっしゃってありました。な
のでテントウムシの石を渡して貰えませんか？」

「へっ！やだね！兄さんにわたるくらいなら今すぐ壊したっていい
！」

「分かりました。素直に渡していればなにもしなかったのに・・・

」

「いくぞ！ザック！！」

「アゲウ~~~~！」

そう言うたザックはオレの手からテントウムシの石をもぎ取り、
飲み込んだ。すると、いきなりザックは光り始めた・・・気付く
とオレの手にはザックの顔が着いていた・・・

それはアローだ！

頭の中に誰かが呼び掛ける。

頭でアローを撃てと命じれば自然と放つ！また会おう！

それから謎の声は聞こえなくなった。

「ふ、所詮はテントウムシの石、しかも一部組み替えか、はははは！死ぬがいい、ガリレイ様につくき弟よ！！」

そう言うとりーゼント太郎はりーゼントの中からなにかの装置を取り出した。そしてりーゼント太郎は光だした。

「ははは！これぞ完全変換！トンボの力を最大限まで引き出してやつたんだ」

そう、ライの目の前にはりーゼント太郎の姿はもう無く、代わりにトンボの姿をしたりーゼント太郎がいた。

「か、勝てるのか？こんな奴に・・・」

03

「どうだ、怖じけづいたか！今なら命は助けてやるぞ？」

「へ、誰が怖じけづいたって！？」

撃て、アローをリーゼント太郎の羽を突くんだ！

ビュン！！

突然ザツクの口が開き、アローが飛び出した。

「いっけえええええ！」

「ふ、その程度の弓……パラリンボム！」

ドカアアン！！

アローはリーゼント太郎の攻撃、パラリンボムにより呆気なく粉碎された。

どうすれば……

目だ！

「えっ！？」

奴はトンボ、目を狙ってアローを放てば奴にはそれがいくつにも見える！

でももうアローは粉碎されてしまった。

DNA一時変換装置はまだ生きている。一度変換を解いてまた変換すればいい。

そうだったのか、なら一度変換を解こう！

「弓をまた取り戻したか、だが勝てるかな？パラリンボム！」

ドカアアン！！

しゃがめ！

オレは謎の声に従い間一髪パラリンボムをかわした。

「今度はこっちのぼんだ！」

アロー！リーゼント太郎の目を射るんだ！

オレはアローをリーゼント太郎の方向に向けた。

キュイイーン！

さつきとは違う音がした。

「な、なんだあああああ！？」

アローは真っ直ぐリーゼント太郎目掛けて飛んでいる。

「パ、パラリンボム！！」

ドカアアン！

「畜生！あと一歩だったのに！」

何があと一歩ですか？あの片なら自分で放った爆発で倒れてますよ？

煙幕が晴れ、そこからチリチリになったリーゼント太郎がいた。

その横にはトンボの石！

「あつた、トンボの石だ！！」

「アゲウウ！！」

いつの間にか変換は解けていた。

「ザック、やったな！」

ガサガサ

「誰だ！？」

0 4

「こ、こんにちは！ぼ、僕、シメジと申します！」

なんと、現れたのは巨大なキノコに手、足目、鼻、口を付けたような生物がいた。

「あ、あのおぼ、僕をあなたたちの仲間にしてくれませんか？」

「兄さんの手下じゃないのか？」

「じ、実は僕ガリレイ様から逃げて来たんです！」

兄さんの元から逃げて来た？

「なぜ逃げて来たんだ？」

「ガ、ガリレイ様は僕をた、食べようとしたんです！」

「・・・・・・」

オレは兄さんの思考を疑った。

「まあいい！兄さんの元にいたんだからインセクトストーンと一時変換装置は持つてるな？」

「いえ、僕は人間と違って変換しなくても十分戦えるので貰ってないです」

そうか、こいつが一つでも持つていればよかったのだが・・・

「まあいい、で、なんて名前だっけ？」

「シメジです」

「そう、シメジさあ！なんかインセクトストーンに関する事とか聞いてない？」

「よ、呼び捨てですか！？ま、まあそれで僕が知っているのはガリレイ様からインセクトストーンを持たされるのはガリレイ様に洗脳されて裏切れないようにするんだ！」

「せ、洗脳！？」

「見つけたぞうゝゝ！」

不意に頭上から声がした。

「誰だ！？」

ドサッ

上から黒い物体が降って来た。

「す、スパイツシュ！」

「スパイツシュとはなんだい？」

「スパイツシュはガリレイ様の護衛をしている蜘蛛さ！きっと僕を殺しに来たんだ！」「オレが助けてやる！ザック、行くぞ！」

「アゲウー！」

「お前の石の討伐は命じられていなかったが、飛んで火に入る夏の虫にならないようにな！」

「僕だって・・・僕だって、やるんだ！！ホーバークステイ！！」

「！？」

#05

いきなりシメジの身体が光り始めた。

ボン！！

シメジが爆発した！？

すると、煙の中からは小さなキノコが……

「行け、パサラ達よ！」

それを合図にキノコ達は一直線にスパイツシュを襲った。

「そんなキノコどもにこのスパイツシュ様がやられるとおもったか
！！」

今までスパイツシュを襲っていたキノコ達は、あっという間に蹴散らされた。

「今だ、お願いします法師（孢子）様！」

すると、シメジの頭から孢子らしき物が一気に放出された。

そしてその細かい孢子はやがてくつつき始めた。

「ほっほっほっ、我こそが孢子族唯一の法師、キノコ リンリンなるぞ！」

周りの孢子とくつついた法師は、手、足、目、口が付いていた。

「ふ、どんな奴を使つたって勝てないぜえ」

そう言つと、スパイツシュはするすると木の上へと登って行つた。
「逃げる気か！？」

キノコ リンリン様が後を追う

「アップルオレンジグレープ」

木上からスパイツシュが果物の名前を唱えた瞬間、急に木からアップルとオレンジとグレープが一気に降って来た。

「いてててて！！」

キノコ リンリン様が喘ぐ。

「しょせんこの程度か」

木の上から見下したようなスパイツシュのこえが聞こえた。

「ま、負けるか〜〜」

シメジがキノコ リンリンと一緒に叫ぶ。
すると、シメジが輝きだした。

「な、何だ!？」

ライとスパイッシュがはもる……

「ウォーーーーー!!」

離れてみているライは、その迫力に驚いた。

「くらえ!!」

キノコ リンリンが手をかける。

「う、うわ〜〜〜〜」

木の上から、スパイッシュの悲鳴が聞こえた。

「やった!勝ったぞ!!」

「え？」

盲点だ!

またもや恒例の謎の声がやって来た。

あの技は盲点に入るんだ!

盲点?

盲点とは眼の中にある場所でな、そこに像が結ばれると見えなくなるんだ!それをあの技は使っている!!

ところで今までずっと気になってたんだけどあんなって……
だれ?

……直に分かるだろう!

そして謎の声は消えていった……

「ライ？」

シメジの声でライは我に返った。

もう既にキノコ リンリンはいない。

「さ、行こう」

「どこに？」

「オレの兄さんの所さ!案内してよ!」

「……うん!分かったよ!ライとならきつと……」

シメジを仲間に加えオレ達はシメジに案内されて、イノセントパレスという所へ向かっていた。

「なあシメジ、一体いつになったらそのイノセントパレスとかいう所に着くんのだ？」

「まだまだ！でもイノセントパレスにはインセクトストーンが一杯保管されてるんだ」 一杯ねえゝ・・・いくら一杯といったって世界にはインセクトストーンが千万個あると言われてるんだ、どうせ兄さんはそんな石には興味がないのだ・・・きつと。

そう、兄さんが欲しいのは・・・

「危ないですよ！に、してもどうしましょう・・・」

シメジに話し掛けられ、オレは我に返った。

なんと、あと二、三步くで深い亀裂に真つ逆さまだった。「さ、サンキューな、シメジ・・・」

「べ、別に御礼はいいですけどこれじゃあ先に進めないよ」
どうすれば・・・

ザックにテントウムシの石を使うんだ！

しかしそれはアローでは？

完全融合するんだ！

か、完全融合！？

リーゼント太郎を覚えてるか？

ま、まあ・・・

あいつはトンボの石と完全融合していたんだ！

ならトンボの石でもいいじゃん！

いや、トンボの石は後で使うから今は使わないほうがいいだろう・・・

なんで？

実は同じインセクトストーンを二回連続して使くと、ランクが

下がってしまうんだ！

ランク？

まったく、インセクトストーンを受け継ぐ家系のくせに全く知識が無いんだから困ったもんだ……。ま、ランクとはインセクトストーンのパワーを示すもので、強ければ強いほど数字は高くなる。ちなみにテントウムシの石は最低ランクの1だ！そしてトンボが4だ！まあそれは今のランクだから上がり下がりしたりするがな！どうやってランクを上げるの？

ランクを上げるには相手のインセクトストーンを戦いで粉砕しなければ上がらない。下げるには連続変換、完全融合の極度解禁、長時間に及ぶ変換などと、下げる方法は皮肉な事に五万と有るのさ！

完全融合の解禁？

そうだ、これは絶対にやるな！ランクが下がるだけじゃなく、命まで危険になるからな！

う、うん

完全融合の極度解禁は完全に昆虫の力を利用出来るようになるんだ！しかしそれは昆虫になったも同然！意識が吹っ飛んで暴走しちまう！ま、それは一部のDNA変換装置でしかできないから恐らく大丈夫だろう！

そ、そうなんだ……。で、ちなみに完全融合はどうやってするの？

ただ完全融合するぞ！って思っていれば出来るけど？

へ、へえ 案外単純なんだね……

ああ

そつえばこの前誰って聞いたら後に分かるとか言ってたけど全然分からないんだけど……

いや、絶対に後に分かる！なので今はこれだけ……。私はキラ、覚えておけ！それじゃあまた、……

キラ、キラ、killer、殺し屋……

いや、今はそんな事を考えないで完全融合だ……

「ザック!!」

そう言ってオレはテントウムシの石を掲げた。

ガブリ

「完、全、融、合~~~~!!」

そして目の前が真っ暗になった・・・

気付くと、オレはテントウムシになっていた。

「ら、ライ……？」

シメジが尋ねてきたが、オレは声が出なかった……

しかたがないのでオレはシメジを掴んで亀裂の向こう側へ飛んだ。
向こう側へ着くと、オレは変換を解いた。

「い、今のは何？」

「テントウムシ」

「そ、そうじゃなくてライがなんで……？」

「うーん……オレにもよく分からないけど完全融合とかいうらしいよ」

「ふーん……」

「ま、行こうぜ！」

その時、オレは妙にだるかったが、そんな体を動かした。

「ここだよ！」

なん時間もかけてたどり着いたその場所は、ただの古いお屋敷だった。

「こ、ここが……？」

「そ、ここがイノセントパレス！」

「誰だ！？」

イノセントパレスの扉を開けるといきなり声がした。

「そっちこそ誰だ！姿を現せ！」

コッ、コッ、コッ……だんだんと足音が近づいてくる。

「こんにちは私はナオ、ヨロシク」

「よ、ヨロシク……」

そこから現れたのは小柄な若い男だった。

「で、何の用だ？」

「インセクトストーンを渡してくれ」

「あなた方は組織の方ですね？」

「違う！」

「違くない！最近組織の行動は分かっているんだ！」

「オレ達はそんなじゃない！」

「信じられない！勝負しろ！」

「え、ええええええ！」

「うを〜〜!!」

小柄な男は光りだした・・・完全変換だ！

やめろ！

「完全變換！！！！！！！！」

「まで！」

上から聞き慣れた声が聞こえた。

「ナオ、この方達は悪い奴らじゃない！」

「そ、そうなんですか？」

「ああ」

間違いない、これは謎の声、キラの声だ！

「キラさん！こんにちは、いや、始めまして！」

「あ、あのおく誰？」

キラの声を聞いた事が無いシメジが戸惑う。

「始めまして、シメジ君！」

そう言うどサリという音と供にキラが落ちて来た。

オレもキラの姿を見るのは初めてだ！キラさんの第一印象は背がもの凄く高い。恐らくは二メートルちよい位はあるだろう。髪は茶髪で耳にはたくさんピアス。そして顔にはキラだけあって傷だらけだ。

今キラさんがシメジになぜオレがキラさんの事を知っているのか

説明している。

説明を聞き終えたシメジは深刻そうな顔をしている。

「シメジ、どうしたの？」

「今からこの俺、キラを仲間にしないか？」

シメジでなくキラさんが先に言った。

「べ、別にいいですけど・・・」

「そうか、ありがとう！実は先日俺の部下が一気におまえの兄さんに殺されたんだ。だから残るはナオ一人、俺は部下の仇をうつ」

「兄さんめ、関係ない人まで・・・」

「いや、関係はある。恐らくおまえの兄さんはインセクトストーンが狙いだと思う」

「やっぱり・・・」

「しかしここにあいつの欲しいインセクトストーンはなかった」

いくら悪者でも自分の兄をあいつと言われるのは気分がよくない。

「あいつの狙いは君の持っているテントウムシの石だ！」

リーゼント太郎の言葉が頭の中でリフレインする。

「では、いつてらっしゃい！」

イノセントパレスには留守番としてナオが残る事になった。

「お、重いよぉ〜！」

イノセントパレスにあつたインセクトストーンを乗せたリアカーを引くシメジが嘆く。

この調子なら兄さんを倒せるかもしれない。

伏せる！

急にキラがテレパシーを送って来た。

横を見るとシメジは既に伏せている。

シュッ！

オレの右肩を弓か何かがかすった。

「あああ、外しちゃったあゝ・・・」
「誰だ!？」

「チャオ！オレッち『チョン』ってんだ！よろしくね！」

オレの前には右腕にボーガンを持った少年が居る。

「なんだ？」

「ガリレイ様の命令で……」

「もういい！そこまで聞けばもう分かるから」

「……あそう」

「まあいい！勝負だ！」

「下がれ、一発で仕留める」

キラさんが前に出る。

「完全変換！」

キラさんはカマキリの石を使った用だ！姿がカマキリになっている。
る。

ザシュン！

オレの目の前を一瞬の風が通る。

目の前には変換を解いたキラさんと倒れているチョンがいる。

「死んでるの？」

オレはもしチョンをキラさんが殺したならばこれで手を切るつもりで尋ねた。

「いんや、気絶させただけだが？まさかキラをキラと勘違いしてない？」

「してます」

「キラは如月等印おんがへんの頭文字さ！」

「なるほど！」

不意にシメジが声を上げる。

「お前の兄さんのアジトについたぞ」

あれからオレ達は二、三時間歩き、ついに宿敵の兄さん……いや、ガリレイのアジトへ辿り着いた。

「懐かしい〜」

シメジが和んだような声を出したが顔は緊張で張り詰めてたんだいる。

「でもこんな所がアジトなの？」

そう、ガリレイのアジトはホームレスの家のようなブルーシート作りであつた。

「中、開けてみな！」

シメジがニヤニヤしながら言う。

「……」

中には穴が開いていた。

「わあああああああああ！！」

今オレ達はあの穴に落ちている。

ポヨォ〜ン

落ちた先は薄暗い部屋にあるランポリンだった。

「よく来たな、我が弟よ！」

暗がりから懐かしい声が……ガリレイだ！

「勝負だ！ガリレイ」

「まて、そう慌てるな我が弟よ」

「インセクトストーンを返せ！」

「お前がテントウムシの石をくれたら私が盗んだ石は全て返そう」

「何を企んでるんだ！？」

「興味があるのか」

「見てくれたまえ！」

あれからオレ達はガリレイに無理矢理連れて行かれて今、広い何やら機械的な部屋にいる。

「これがお前のたくらんでいるものなんだな？」

「素晴らしいだろ？これは新型のDNA変換装置でな、あとテントウムシの石があれば完成するんだ！これが完成すれば普通のDNA変換装置にあるバグだって修復出来る！そして皆が安全にインセクトライフを楽しめるんだ。だから私にテントウムシの石を譲ってくれないか？」

オレはガリレイが悪い事を企んでいるからオレのテントウムシの石が必要なのかと思っていたし、家からインセクトストーンを持ち出したのだってそのためだと思っていた。しかしガリレイが皆がのためを思っただけでいたとは……

「分かったよ、ガリレイ……いや、兄さん！」

そしてオレは兄さんにテントウムシの石を渡す。

「ありがとう、我が弟よ！」

そして兄さんは装置にテントウムシの石を入れ、その装置へ乗り込む。

「後は、人間があれば完成だ」

急に兄さんの様子が変わった。

「まんまと騙されてくれたな！これで世界征服なんぞ朝飯前だ！おっと、後は人間が必要だったな……」

オレを使う気か？

「これが誰か分かるかな？」

そう言つと兄さんの乗っている装置の蓋らしき物が開いた。

「……チエ、チエチイなのか？」

そこにはぐつたりとしたチエチイの姿があった。

「こいつが装置の原動だ！助けたかったらこの装置を倒す事だな！ま、一つ情けとして言うが一時間もすれば彼女は死ぬ！一時間でこの装置は奇跡でも起きない限り倒せない！潔く諦めて帰った方がいいぞ！私が世界征服したらお前達は楽な生活を保証してやる！だから……邪魔をするな！！」

「ふざけるな……チエチイは、チエチイは……オレの友達

「だあ！……！」

「俺も、部下の仇を伐たないといけないしな！」

「ぼ、僕も奇跡に賭けてみるよ！」

「哀れな奴らだ！私に刃向かうなら……殺す！」

タイムリミットは後一時間、一時間で絶対兄さんを倒す！！

最終話

「チエチイ、待つてろよ！」

そう呟くとオレは適当にシメジの持つリアカーからインセクトストーンを取り出す。

「完全変換！」

キラさんと同時に完全変換する。

キラさんはカミクリムシ、そしてオレは……ゴキブリだ。

ライ、今変換を解いてる暇は無い！あの女が死ぬまではあの装置はまだ完全じゃない、つまりはまだ倒せる可能性があるんだ！

「ジードキャノン！」

シメジも参戦してくれるようだ。

ズバババババ

シメジの手に急にキャノンが現れ玉が出る。

オレ達も行くぞ！

了解！

「兄さん、覚悟しろ！」

オレは装置に体当たりする。

「利かないぞ、そんな技……」

機械を通して兄さんがオレに言う。

「ライ！技を使うんだ！」

そういつてキラさんは目からレーザーを出す。

ガリガリガリッ！

装置から火花が飛ぶ。

「すごい！でも技ってどうやって出せば……」

「今からインセクトストーンに入っている技データを転送する！」

「お願いします！」

しかし何故さっきから兄さんは動かないのだろうか？

「よし、転送したぞ！」

そう言われたとたんに目の前が赤に染まった。

『ゴキブリの石　ゴキブリ亜目型。技・・・スケールスピード』時速三百キロで走る事が出来る。クロースライフ。戦いで負けてもこの石は破壊されない。ピクキースト。敵にウィルスを送りつけ攻撃する。』

なるほど、今はピクキーストを使えばいいわけか！

「くらえ！」

「そろそろ・・・行くかな？」

不意に兄さんの乗った装置が動き出した。

「ヘラクレス！」

兄さんの声が聞こえたと思うと目の前には黄色に黒の細かい斑点があるカブトムシ・・・カブトムシの中でも九ランクに位置するらしいヘラクレスオオカブトが現れた。

「こいつはやばいぞ！」

「どうすればいいんですか！？」

「焼きマツタケ！」

シメジが意味不明な事を言った。

ポワン！

謎の音とともに煙幕とマツタケのいい香り・・・つまりは焼いたマツタケを出現させた訳か！

ジュボツ！！

ヘラクレスオオカブトのケツに火が移った。

「使えん・・・行け！スズメバチ！」

「またもや強敵・・・」

「く、やばいぞ！」

キラさんもそろそろこのスタイルじゃあ勝てない事を感じたようだ！

変換を一端解こう！

分かりました！

「完全変換！！」

今度オレ達は二人そろってカマキリになった。

「そう来たか、では……」

いきなり目の前で爆発が起きる。

「爆弾虫だ」

「爆弾虫？」

爆弾虫、聞いた事も無い虫だ！

「コロコロコロ」

おそらく爆弾虫の鳴き声らしき声が聞こえる。……どこにいる？

バン！！

またもや目の前で爆発が起こる。

「どこだ！？」

おそらく爆弾虫とは体内で何かしらの反応を起こして爆発を起こす昆虫の事だろう！昔爺ちゃんそんな虫の話を聞いた覚えがある！爆発って事は虫になっていたら焼け死んじゃうんじゃないんですか？

よし、完全変換はやめて半変換にしよう！

半変換？

テントウムシの石で言えばアローの変換の事だ！

分かりました！

「シメジ！頼む！」

「分かりました！」

一瞬で何かを判断したのだろう！シメジはオレ達の周りを集中的に撃ってオレ達に爆弾虫の攻撃が当たらない様にする。

「そんな事をしなくたってこっちから姿を現してやるぞ！」

なぜそんな自分にとって不利な事を？

「もつとこの戦いを楽しみたいからな！！！」

なるほど、兄さんらしい考えだ！

オレ達は同じくカマキリの石を使って半変換をした。そして武器はカマキリだけに鎌だ！

「こ、こんなんじゃないやああの装置まで直接ダッシュで近づかないといけないじゃないですか！」

「大丈夫、これからは衝撃波、それからは大量の水が出る様になっている！」

「まるでロツクンですね！」

「今はそんな事を気にしている暇は無い！行くぞ！」

「はい！」

「よくやったな……まさかここまでこの装置が壊されるとは思いもしなかったよ！」

「へ……どうだ！……」

「だが……これで終わりだ！楽しかったぞ！我が弟達よ！」

そうして兄さんは装置についているハンマーのようなものを動かしたようだ！

ズドン！！

重たい音がしてそれが落ちてくる……もうオレ達には逃げる力など到底無い。

「しねえええええ！」

兄さん、あんたの事は死んでも恨み続けるぜ！それからチエチエ……助けてやれなくて……ゴメン！

「……………」

オレは……生きているのか？いや、兄さんの乗っている装置が上から見えている。つまりオレは死んでいる！

「ラ……ライ」

キラさんが何故かオレの名を呼ぶ。

「何故だ……何故だああああ」

何故兄さんは絶叫しているんだ？そういえばさっきから体が重たい……………」

「ん？」

何故かオレは六本の足がある。

「チエ、チエチイ？」

オレの背中の上にはチエチイの姿が……………そうか、オレはとっさに変換していたのか。

「ライ！早く降りてきて変換を解け！死ぬぞ！」

何故だ？そういえば段々体が重たく……………」

そしてオレは再び意識を失った。

「大丈夫か？」

ハッ！？ここはどこだ？そういえば今兄さんの声を聞いたような……………」

……………」

「ライ！」

キラさんの声だ！

「お、おきてくれよう……」

シメジ……………」

「あぐう……」

ザックか……………」

「起きなさい！ライ！起きないと……………起きないと……！」
バシッ……！

頬に痛みがある。チエチイ、よくも叩いたな！

そして今度は頬に熱い線が……………」

「皆……………」

オレは皆の姿を確認した。

「あれほど極度解禁はよせと言っただろうが……！」

キラさん……

「皆」

そこでオレはさっきの熱い線の正体を知った。

「すまなかった……ライ」

兄さん……

「ライ、大好きだよ！」

チェチイが思いっきり抱きついてきた。

あれから八年の時が経った。

「行くぞ！ザック」

今オレはインセクトポリスと言う警察のような仕事に就き地球の治安を守っている。

仕事が終わりに戻ればチェチイが旨いご飯を作って待っている。

「まてえ」

そしてまた同じ事の繰り返し……

こんな暇な毎日をオレは楽しんでいる。あの時を思い出しながら……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9463c/>

インセクトワールド

2010年10月20日19時53分発行